

「全少」を日本一研究する指導者による提案

ZENSHOに 挑戦しよう！



第88回

養正館館長 渡辺貴斗



ウチの子、もしかして発達障害？(その4) 自閉症の子への指導

★自閉症の子には、前もって知らせる

養正館では、稽古を始める前に、その日の稽古内容を子供たちに簡単に説明しています。例えば、「8月21日は何の日でしょう？」と質問すると、誰かが「審査会です」と答えます。そこで、「正解です。あと1ヵ月位ですので、今日から審査会まで基本、約束組手、形の練習が中心となります。しばらくは組手の練習があまりできませんが、帯が変わらないのも困りますね。合格目指して頑張ってください！う！」などと、今日の稽古内容と今後の予定もさらっと触れておきます。そうするとスムーズに練習に移ることができます。今日やることが分かっていると、自閉症の子はとても不安になります。

初級の部から中級の部へ進級すると、組手防具をつけて組手試合の練習をするのですが、そのような未知のことをやる時は、自閉症の子はパニックになりますので、「防具を付けて、こんなことをやりますよ」と見本の子を使って身振り手振りで説明してから防具を付けさせるようにしています。このあと何をやるのか見通しがつくと、自閉症の子に限らず、子供たちは皆、安心して新しいことを受け入れることができるのです。

★自閉症の子には大声で話しかけない

道場生の自閉症のM君は、悪いことをした人を私に大声で叱ると、自分が叱られたわけでもないのに両耳を手で塞いで壁の方を向いてしまいます。M君がいるときはできるだけ大声を出さないように気をつけているのですが、「あ、またやってしまった」と後悔することも少なくありません。M君に、「ご

めんな、大丈夫？」と気遣うと固まったままです。学校で同じクラスだという女の子が「M君は学校でも誰かが叱られると、こんなふうに耳を塞ぎます」と教えてくれます。怒られている子を自分に投影して、自分が怒られていると感じているのでしょうか、そのあとは30分ほど固まって動けなくなってしまう。

M君は音にも敏感で、休憩時間など、みんなが大声を出して騒ぎ始めると悲しそうな困った顔をします。できるだけパニックにならないように気をつけていますが、パニックになってしまったときは、道場の小部屋（倉庫）で、外界からの刺激を遮断し、回復を待ちます。

★言葉の理解より、目からの情報

自閉症の子は、耳からの情報よりも、目からの情報の方がすんなり入るように感じます。どんなに詳しく説明しても、言葉の説明では理解できないことがあります。そこで、少し難しい話をするときは、厚紙に印刷したイラストを準備しておいてそれで説明します。小道具を使うこともあり、例えば股関節の抜きを教えるときは、だるま落としを使って説明します。腰の回転によるムチミの説明をするときは、でんでん太鼓を使います（連載44～49回参照）。

とはいっても、全て目からの情報というわけにもいきませんので、言葉だけの説明で理解してもらわなくてはならないときもあります。そのような場合は、抽象的な表現を使わないようにしています。「ちゃんとやって！」のような言い方では自閉症の子には理解できません。「ビシッと音が鳴るく

らい力を入れて、「自分の目の高さを見て、目線を止めて」「だるまさんが転んだ！ピタッと止まって」のような具体的な指示でなくては伝わりません。「ちゃんとやって！」では何も伝わっていないのです。また、自閉症の子は空気を読むことが苦手です。「ほら、見学のお母さんが見ているよ」のような、気づかせるような抽象的指示も理解できませんので、「両手をギュッと握って！」など、具体性を持たせた指示が求められます。また、否定表現だと理解し辛いので、肯定表現に直してから伝えます。「低くしないで」ではなく「高くして」と言い換えて、子供が頭の中で肯定表現に変換しなくても理解しやすいように、指導者が先に頭で変換してから指示を出すようにしています。

★健常児もグレー？

自閉症スペクトラムといっても白か黒ではなく、薄いグレーから黒まで、まるでグラデーションのように連続的につながっています。スペクトラムの意味は「連続体」という意味で、正にグラデーションです。特別支援学級に所属していない、健常者といわれている子供たちにも、その程度の差はあれ、自閉症の要素を持っている子が存在します。その日の稽古において、出席者の全てが健常者であっても、グレーの子は少なからず含まれていますので、自閉症の子に伝えるような伝え方でないと理解できない子もいるということです。自閉症と診断されたから黒、自閉症と診断されなかったから白というわけではないのです。みんな程度の差はあれ、健常者グループでさえも、「ごくごく薄いグレーから濃いめのグレーの子たち」で構成されていると考えてください。特別な子だけに特別な指導をするのではなく、みんな

に同じ指導をして、誰も置いていかれないような工夫をすることが大事ですね。

★発達障害の子も全国入賞

自閉症の子は、ひとつのことに集中して興味を持つことが多いですが、オタクは皆、男の子ですね。男子脳は自閉症児の脳と類似性が多いという報告もあります。よって、健常児のクラスでも言葉だけでは理解しづらい子が複数いるという前提で、子供たちの指導に当たることが必要です。極論を申しますと「全員が自閉症児である」と思って指導するくらいでちょうどよいと思います。そうすることで、理解できずに置いていかれる子を救うことができるのです。私はこのことについて、かなりの神経を使って、この20年間指導してきました。

養正館は全少で毎年、複数の子を入賞させてきましたが、特別に運動神経が良い訳ではない、ごく普通の子や発達障害の子の入賞も過去に少なからずあります。運動神経の特別良い子だけを選抜して強化していたら、このような複数の入賞は続けられません。学校で失いがちな自己肯定感を道場で高めてあげられたら、その子は自分を否定せず、自分のことが好きになり自信を取り戻せると思っています。

PROFILE

■渡辺貴斗 TAKATO WATANABE

1968年4月20日生まれ。7歳から父である館長から空手の手ほどきを受ける。児童心理学や成功哲学を研究して子どもたちの「心をつくる」指導法に切り替え、2013年5名、2014年・2015年7名、2016年5名、2017年9名、2018年・2019年5名を全少入賞させ、一道場での全国最多入賞を連続で記録する。道場経営でも、一道場で350名を超える大躍進を続ける。



空手道場 養正館／静岡県沼津市本田町11-12



2022年 養正館「全少」・「全中」14名出場決定！

全少と全中の静岡県予選会が、4月24日、5月29日にそれぞれ開催。全少13名（形6名・組手7名）、全中1名（形）が、沼津市に表敬訪問。頼重秀一市長（写真右）、奥村篤教育長（写真左）の前で「全力を尽くして、また入賞報告に参ります」と宣言。

【写真前列 左→右】

小3男子形2位・向山蓮／小2女子形2位 組手1位・植松明莉／小2女子組手3位・辻奥杏珠／小3女子形1位・齋藤美月／小1女子組手1位・山本美緒／小1男子形2位・山田龍聖／小2女子組手2位・大木あゆな

【写真後列 左→右】

小4男子組手3位・高木玄修／小5男子組手2位 後藤優／小6女子組手1位・工藤彩音／小6男子形1位・三井詠一朗／小5男子形2位・尾花叶眞／小5男子組手3位・下蔵寛明／中学男子形1位・伊藤耀聖

